



IC たより

公益社団法人 国際IC日本協会機関紙

一人ひとりのチェンジで信頼を築く

発行年月日 2014年10月31日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
パレ・エデルネル 206号
TEL: 03-6273-1428 FAX: 03-6273-1429
E-Mail: info@jp.iofc.org
HP: www.jp.iofc.org

頒価 1部100円

15

Initiatives of Change Japan

◇ 目次 ◇ I N D E X

第36回IC国際フォーラム

APYC2014 報告 (台湾)

学校訪問 2014 報告

ブックマン博士の映画作成に向けて

他



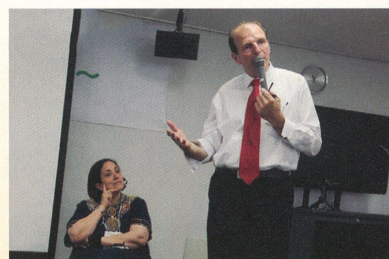
第36回IC国際フォーラムを開催

去る6月20日から22日まで、「Celebrating Diversity 一多様性を力に変えよう！」のテーマで、第36回IC国際フォーラムが開催されました。来日したICインターナショナルのオムニア・マズーク会長を始め、インド、インドネシア、エジプト、カナダ、韓国、ケニア、コソボ、台湾、中国、ネパール、ベトナム、マレーシア、日本という13ヶ国・地域から様々な宗教・文化・年齢などの背景を持つ89名が参加しましたが、その多くが青年たちでした。マズーク会長は、「世界各地の紛争を解決するために、一人ひとりが生き方をチェンジし、国籍・人種・宗教・文化・世代・ジェンダー等の違いを超えて、相互信頼のための架け橋を築くような生き方が求められている」と語りました。エジプト出身のイスラム教徒で、現在、イギリス在住のマズーク会長自身も、「欧米の人々がイスラム文化への理解を深め相互の信頼が進むようにすることが自分の使命の一つです」と、その取組や体験を披露してくれました。ゲスト・スピーカーとして参加した、アハメット・シャラ駐日コソボ大使は、「セルビアとの紛争を経て独立した現在も、多くの異なった民族が共存していけるための国づくりが大きなチャレンジですが、そのことに努めています」ということを様々な体験から語ると共に、「先ず自分の周りをきちんとできない人に平和作りを語る資格はありません。今朝、ベッドをきちんと整えましたか？」と参加者に問いかけました。

このフォーラムでは、お互いの多様性を認め合うことにつながる多くの体験を聞いた全体会議や、各人が深く関心を持つテーマについて自由に話し合えるオープンスペースといった時間に加え、ICの掲げる、絶対正直・絶対純潔・絶対無私・絶対愛という精神に自分の在り方を照らし合わせ、心の奥の声に耳を傾け、静かに内省する時間（Quiet Time、静かな時間）、様々な人たちが小さなグループで深い話し合いができたファミリーグループの時間、そして、多様な文化の存在を正に祝うような、「文化の夕べ」といった楽しいプログラムが設けられました。また、歴史的な経緯から現在も難しい国際関係が続いている、韓国や中国と日本の青年たちが共に並び立ち、体験を語り、お互いの友情を示してくれたのも印象深い場面でした。参加者からの感想を紹介します。

「私にとって一番大きかったかな、と思うのは、『自分からコミュニケーションとりたい!』と2日目に思えたことです。初日には『受け身な自分が嫌だな!』とっていました。『自分から』というのは、Quiet Timeに自分と向きあって出てきた気持ち。これと同時にいろんな恐怖心がなくなった気がして。それよりも新しいことに触れること、自分を知ってもらうことをやりたいと思うようになりました。こうやって自分の気持ちが変わってからは、楽しさが何倍にもなって、心も解放されたような感じですので良かったです。この経験が私のこれからの良い影響を与えることは確かです!」(大学生)

「このフォーラムから多くのことを学びました。マズークさんが言われた、『人を盲目的に、あるいはステレオタイプで判断するのではなく、それを相手への好奇心に換える』ということを決して忘れないようにしたいと思います。とはいえ、私はまだまだ、ステレオタイプで人を捉えてしまいがちです。しかし、このフォーラムのテーマのように多様性を認めるとき、それを祝福できるようになると思います。このフォーラムを通して、色々な宗教や文化の違いについても学ぶと共に、自分を深く内省することも学びました。初めて、自分の文化についてももっと知りたいと望み、また、初めて自分の意志でスピーチをしようとも思ったのです。同時に、誤解に基づく多くの涙を見て、中国と他の国々に友情の橋を架けるために何かをしたいと思いました。このフォーラムで多くの感激を得、多くを学び、大きく変わったと共に、たくさんの素晴らしい友人たちを得ることができました」(中国からの留学生)



▲講演者のシャラ大使 (後はマズーク会長)



▲深い話し合いが行われた



▲文化の夕べを楽しむ参加者たち



▲福島での被災者の方々との交流 ▼大学生・中学生との交流▲



2014年の学校訪問プログラムについて

本学校訪問プログラムは、2002年にスタートし、今年で12年の実績を積み重ねてきました。当初は当時小田原アジアセンターでの国際会議に参加した青年の中からの選抜チーム5・6名でスタート、2週間の滞在期間の内1週間を小田原市・箱根町での小学校・中学校・高等学校・専門学校6校を訪問する事から始まりました。それまでほとんど未開拓であった学校訪問という分野が拓けていったのは、小田原アジアセンターとLIOJ（アジアセンターに併設されていた外語教育研究所）の存在、そこに繋がるIC会員のイニシアティブと同市で永年ICの活動を続けてきた会員による活動実績と協働の働きがあったからです。

2002年当初は、当時スタートした国際的なIC青年リーダーシップ育成プログラムであるAction for Life (AfL) の開催に合わせて隔年で行う予定でしたが、2004年からはAfLの修了生の参加を得、以降、2008年まで毎年このペースで行われてきました。

2009年からは、小田原市教育委員会からの予定からの要請（市内の公立小学校25校を全部カバーしてほしい）を受け、また財団法人MRAハウスからの助成金が受けられるようになった結果、この学校訪問プログラムは2週間から2ヵ月間に延長され、更に、訪問先も東京・福岡に拡大され、訪問先の学校も大学まで含め25校に増えていきました。

その後北九州地区のIC会員有志の働きかけにより北九州市教育委員会からも正式要請を受けるようになり、更に広島・岐阜・京都在住の会員のイニシアティブによりそれぞれの地区の学校訪問に繋がっていきました。こうして逐年経験を積み重ねていく中で、この学校訪問プログラム自体も洗練され、海外の青年達とのユニークでかつ生きたく出会い・ふれあい・学び合いの交流プログラムとして、教育現場では外国語教育への興味と関心・意欲を喚起すると共に、自分の内面と向き合う道徳教育の要素を持つ教育プログラムとして、日本の学校教育の中に着実に受け入れられてきています。その様な拡大基調にある中、2012年からは更に静岡県教育委員会からの正式招請も受け、その他、つくば市在住の会員や同年APYCに参加した福島大学の学生との協働イニシアティブにより、訪問先は1都10県18都市の35校にまで増えるに至っています。今や次の拡大発展に向けてどのように態勢を整えていくか、新たな局面に直面していると言えます。

その様な実績を背景に、本年の学校訪問では、それぞれ初の来日となったインドのアツヌオ・ヒエカ（アツ）さん（インド東北部ナガランド出身、元高校教師）インドネシアのユディ・セプティアワン氏（大学院生・英語教師）とコソボのアルバー・フェテュー氏（カナダ国籍も所有、NGOで活動）、そして、更に日本人の木村美香さん（大学で教育学と心理学を専攻）という4名のチームで、5月7日から7月7日の2ヶ月にわたり東京都、つくば市、静岡県、小田原市、北九州市、福岡市、佐賀県、広島市、名古屋市、福島県という各地で小学校から大学（インターナショナルスクールを含む）まで32校を訪問し、多くの生徒・学生さんたちと交流を重ねました。

映像を見たり、又、実際に民族衣装を着てもらったり、それぞれの国旗の意味や挨拶の言葉を習ったりというような各国の文化の理解の部分と、寸劇やICのメッセージソングやメンバーのチェンジの体験の紹介等を通してのこころの教育の部分で構成されたプログラムは、テンポよく進み、訪れた各校の生徒さんたち、そして先生方にも大変好評を得ました。

又、本年からは、小学生は、5・6年生を主な対象にし、連続して2コマの授業の枠を頂き、1時間目はこちら側からのプレゼンテーション、2時間目は生徒さんからの発表や文化紹介等、双方向の交流が出来るような学校が増えました。今回、初めて訪問した静岡県内の中学校では、外国青年に向けた、自分達の住む町や学校の紹介にも生徒達自身の事前調査や発表方法に創意工夫が見られ、プレゼンテーションに於ける課題が見えてきたとは、ある担任教師の言葉です。また、静岡県教育委員会の仲介で毎年1校特別支援学校を訪問していますが、今年は県東部特別支援学校の小・中・高等部の生徒達との多様な交流と合わせて、専門職員との質疑応答を通じて障害児教育の現状と背景について相互に学びあうことが出来ました。

小田原市でも、従来1日2校から1日1校への訪問になり授業数も1コマから2コマになったことにより、2コマ目での学校側主導（先生の指導と生徒の事前勉強の協働作業）による日本文化（遊び・歌・ゲーム・観光スポット）の紹介や、外国青年の出身国についての事前勉強の成果が質疑応答の中で活かされ、これまで以上に交流授業の意義が実感されました。

海外の青年たちにとっても給食や掃除、更には一緒に遊ぶなどの時間を通し、日本の学校生活全般への理解も深まり、日本の学校の良い点を故国の学校に紹介したいという海外からの青年たちのプランに繋がりました。（インドネシアのユディさんは、今後インドネシアでもこのような学校訪問プログラムをスタートさせたいと望んでいます）

更に、高校生や大学生を対象としたプログラムには、自分のこれまでの生き方を見直し、新しい気付きを得られるようなワークショップ的な要素も加味されています。福岡市の大学生たちからは、「今日一番大事だと思ったことは、自分の考えをはっきりと相手に伝えること、きっかけひとつで自分の人生や考え方が変わったり、冷静に自分を見つめ過去を振り返ることができるということ学んだ。だから私も行動したい。障害物を取り除いても次々に出てくるものだからひとつずつ取り除いていくことが大事だと思った」、「今日話を聞いて、自分の殻に閉じこもっては駄目だ、もっと自分から積極的に話せるように努力しようと強く思った」、「世界は広いし、もっと視野を広く持ち今後いろんな人と親しくなりたい」などの感想が寄せられました。

北九州市では、小倉東ライオンズクラブと教育委員会の全面的なサポートを頂きましたが、表敬訪問した北橋市長、続いて、垣迫教育長の前で家庭の融和をテーマにした寸劇を披露しました。北橋市長は、「これはどこの家でも起こりうることに感じました」と言われ、その後の会話も弾みました。

名古屋区立の小学校の校長先生からは、「前任校でも色々な国際交流の行事を体験してきましたが、今回の皆さんのプレゼンテーションには感激しました。多くの学校でこのような体験をさせてあげて欲しいです」とのコメントを頂きました。

福島大学では、災害ボランティアセンターでボランティア活動に励む学生さんたちと交流した他、翌日には森合仮設住宅を訪ね、被災者の方たちと交流を行う貴重な機会も得ました。被災者の皆さんは、体験をお話し下さると共に、コソボのアルバーさんの内戦の経験などの話にも熱心に耳を傾けてくれました。

又、海外からのボランティアグループの青年たちは、各地でホームステイの機会を得ましたが、日本の文化に深く触れると共に、ホスト・ファミリーの方々との間に深い絆が生まれました。

静岡でのホスト・ファミリーの方からは、「大阪出身の美香さん、インドからのアツさん、わずか3泊の短い期間でしたが、我が家の3人娘が5人娘になって、この生活がずっと続いてもいいなと思うくらいでした。・・・このような青年の方々、又、これからも世界の多くの若者達とふれ合う機会をつくって下さり、我家の娘たちのような感動を受けることにより、世界平和が一歩ずつでも進みますことを心より願っております」といったお手紙も頂きました。



第20回アジア・太平洋 青年会議 (APYC)

去る8月2日から9日まで、第20回アジア・太平洋青年会議(APYC)が「分裂した世界に信頼の橋を架けるための青年の役割と責任とは」のテーマの下、台湾にて開催されました。インド、パキスタン、バングラデシュの3か国の代表が一堂に会したのを始め、東アジア、東南アジア、そして太平洋からの計13カ国・地域から110名余の参加者がありました。香港理工大学は25名の参加者を送ってきましたが、そのうち10名余りは中国本土から香港に来て学んでいる学生でした。日本からはイギリスや香港で学んでいる2人の青年を含め大学生・社会人から成る9名が参加したのを始め、日本に留学中のマレーシアのチーさんも参加し、日本のチームのサポートをしてくれました。講演や多くのワークショップから多くのことを学ぶと共に、台湾の子供たちに各国の文化を伝えるイベント、そして台湾の文化を学ぶ機会も与えられました。又、日本人と中国人、韓国人、そしてフィリピン等の青年達が歴史を踏まえ現在の国家間の様々な問題を真摯に話し合う会合が連夜遅くまで行われました。香港で学ぶ中国の青年は、「ここで台湾の青年たちと心を開いて話し合い、彼らがどんな考えを持っているのかが良く理解できるようになりました」と述べました。日本から参加した青年の感想の一部を紹介します。

「APYCはたくさんの国の友達を創ることのできる非常に貴重な場だった。たった8日間を共に生活する環境があるだけで、人にとってそれがどれだけの可能性を秘めているか計り知れない。そう感じた。あの場で私は台湾、カンボジア、香港、パキスタン、バングラデシュをはじめとする、数多くの友人ができた。しかもただの友人ではない。そこでは、一国家の代表として対話し、自国の文化や現状、歴史観等を紹介する。それはつまり自分が話したことや立ち振る舞いそのものが、その国の印象となる場であり、自分自身は、いわば『国の顔』となるのだ。例えていえば、『台湾』というワードを耳にしたとき、まず最初に脳裏に走るのがAPYCでできた台湾人の友人の顔となるのだ。つまり、これまで持っていた『国のイメージ』がAPYCを通してその『友人』のイメージに変換されるのである。この変化は非常に重要な意味を持っている。何故なら私自身もそうであった様に、友人がいない国のイメージはテレビや新聞、ラジオ、雑誌などメディアを通して育まれることがほとんどであり、それは時には、偏った一面的なイメージを持ちやすいからだ。このフォーラムを通して特に印象が変わった国がある。それはカンボジアだ。カンボジアに対して私はアジアの最貧国、破壊されたアンコールワット、人々が非常に貧しいというイメージを持っていた。しかしそれはカンボジアのほんの一面であり、同時に全く異なる面もたくさんあることにルームメイトのカンボジア人によって気づかされた。優しく豊かな心を持っている国民性や首都プノンペンの発展度合い、カンボジアの歴史を話で知る事ができた。さらに実はAPYCの後、カンボジアを含めるアジア各国を回る予定があることを話すと『自分がカンボジアを案内するよ!』と誘って頂き、一緒に1日カンボジアを周り、ご家族の方とも対面させてくださる非常に手厚いおもてなしを受け肌でカンボジアを知る事もできたのだ。この様なことから自分が一人の人間としてできることの可能性がさらに広がったような気持ち、これは全てAPYCがもたらした変化なのだ。この経験は自分のカンボジアのイメージを変え、さらに間違えなく今後の自分の生き方や外国人を日本で案内する際の気持ちをも変化させた。

そして、もう一つの変化となったきっかけがワークショップだ。私はファミリーワークショップというワークショップに参加した。このワークショップでは家系図を書いて、自分と家族の関係をグループの人に対してお話しするのだ。これまでに、自分自身のタイムラインを書きそれについて話した事は何度もあったが、自分の家系図を使ってお話をすることは初めてであったため新しい発見も多く、自分の家族と向き合う大きなきっかけとなった。特に中学校以来、仕事の関係で共に住んでいない父との関係について振り返り、それを人に話し、さらに自分の家族に対してグループのメンバーからフィードバックを受けた際にはこれまでになかった視点をたくさん得る事ができ、今一度家族の重要性を感じた。そして最後に父へ手紙を書き、その後に父になりきって手紙に返信を書く、そしてそれを声に出して読むというワークが私の心を変化へと導いた。変化とは、これまでになかったことや、できなかったことをする事をさす。これまで、父へ思っていることは手紙に書く事もなかったし、さらにはそれを声に出して他の人に聞かせるということなんて照れくさく、恥ずかしすぎてしたことがなかった。しかし、この普段は絶対できない、自分からやろうと思わないことをできるようにしている環境がAPYCにはあり、だからこそ、変化が生まれるのだなぁと納得していた。事実、父親との関係を見直し、少しずつ色々なことを話すようになってきた」

「APYCでは様々な<学び>を得ることができましたが、その中でも特に印象に残っているのは、『どのようにして人生を生きていくのか』ということに対する答えです。無論、全ての答えを得られたわけではありませんが、プログラムの中で色々な人生談を聞いたり、同世代の友人らと話したりしているうちに、徐々に答えを掴み始めた感触がありました。APYCに参加する前は、『どのように人生を生きていくのか』ということについて、非常に悩んでいました。進路一つ取っても、『自分が本当にしたいことは何なのか』、『4年生になったら就活をして、企業に入ることが私の本当の幸せなのか』等という思いがありました。また、大学での勉強に対するモチベーションも低く、授業も休みがちで、『何で自分はこんな状態なのだろう』と悩んでいました。そのような状態では、周囲の友人らが完全無欠の人間に見えてしまい、『彼らはすごくできるのに、何で自分はできないのだろう』と感じるようになってしまいました。そして、いくら探しても答えの出ない日々の中で、強い閉塞感を感じるようになっていました。

しかしながら、今回のAPYCに参加して、同世代の友人らと本音で話し合ったり、年上の方々から『どのように人生を生きてきたか』という話を聞いたりしたことで、皆、同じように悩んでいるのだと分かりました。悩んでいるのは自分だけではないということを知ることができただけでも気持ちが楽になりました。また同時に、他の参加者の方々が、自分の抱えている問題に向き合おうとしていることを知り、自分も向き合ってみようという気持ちになりました。中には、既に問題に向き合ってそれを乗り越えた方もおり、『どうやって問題を乗り越えたか』ということについて話してくださったりもしました。そのような様々な体験から、問題を乗り越えるためのヒントを数多く得ることができ、人生に対して新たな見方ができるようになりました。

これからも様々な問題に直面するとは思いますが、そういった時こそ今回のAPYCを思い出しながら、APYCの友人たちと連絡を取って励まし合いながら乗り越えて行きたいと思えます」

▼台湾の学生たちに各国の文化の紹介も ▼文化の夕べでの日本チーム ▼台湾の文化にも触れる



フランク・ブックマン博士の映画作成に向けて

去る9月7日から12日まで、フランク・ブックマン博士についてのインタビュー収録のため、イギリスから、監督、インタビュアー、カメラマンからなる3名のIC映像チームが来日しました。監督のイマッド・カラムさん（Dr.Imad Karam、38才、パレスチナ・ガザ出身、現在、英国に在住）が、いかにこの映画を作ろうと思いついたのかを伺いました。

「スイス・コー（Caux）でのIC世界大会からガザに戻った友人を通し、コーのことを知り、私も、その会議に参加しました。そこでは、第2次世界大戦後のフランスとドイツの和解のために貢献した故マダム・ローのライフストーリー（*参照）を聞きましたが、『この話は、戦争が終結した状況の中で、“許す”という選択をした女性の話だ。自分の国では、今も正に紛争の中で市民の命が奪われ、血が流されている』と思ったのです。またある時、英国のICの人が、ガザを訪問すると聞いて、ガザの将来について、何か外国・大国の都合にいいような指示をしようとしに来るのではないかと懐疑的でした。しかし後に、ジャーナリズム・メディアの博士号取得のための奨学金を受け、ロンドンで学んでいた時に、ICの映像チームの主要メンバーであった故デービット・チャナー氏の薫陶を受け、ICのドキュメンタリー映画制作に加わることになりました。その中で、ブックマン博士が、戦後行った世界的なMRAのキャンペーンを通して、いかに世界を変え、平和をもたらすために大きな役割りを果たしたのかを学びました。同時に、疑問も湧いてきました。『それだけ凄い人物が、何故、今日の世界で知られていないのか？』、『ブックマンは、一体どのようにして、その様な大規模なキャンペーンを行い世界平和に貢献出来たのか？』、『大陸規模でブックマン博士が成しえた偉業の遺産とは何だろうか？』などです。

世界各地では、未だ多くの紛争が続き、自分の国でも多くの一般市民が巻き込まれ血をながしているのが現状です。ブックマン博士が当時100人～200人の規模で、MRAの平和・融和のメッセージを携えたミュージカルを、世界中で披露したようにはできなくても、来年のコー世界大会には、パレスチナ人とイスラエル人を少なくとも5人ずつ、一緒に参加させたいと考えています。今のICでは、大きな規模でのミュージカルを制作することはなかなか難しいので、代わりにブックマン博士の影響を受けた世界中の人びとのインタビューを記録に残し、世界に彼が成し得たことを伝える映画を制作したいと考えました。

第1次世界大戦後、ブックマン博士が今こそ「道義と精神の再武装」をした人々が必要とされていると謳い、各国の指導者からエレベーターボーイに至るまで、あらゆる人びとに心を配ると共に、どのように世界平和に貢献してきたかを、写真・絵で描いたビデオは既にありました。しかし、現代の若い層にも関心を持って見てもらえるよう、ブックマン博士が残された遺産についての新しい記録映画をつくりたいと思いついたのです。

ICで働き始めて12年、伝統ある英国のICチームの人々と比べればICとの係りの時間の浅い私が、ブックマン博士の記録映画を制作することへの賛同を得るには、時間がかかりました。その都度、募金を集め、これまで、アメリカ・イギリスでのインタビューが実現しました。今年は、日本の前にインドを訪れ、この後には韓国を訪ねて、MRA/IC関係者のインタビューを続けていきます」

戦後MRAを日本に紹介し、MRAの信念をもって、日本社会の復興に尽くされた各界の皆さんの多くがすでに他界されている中、今回快くインタビューを引き受けて下さったのは、渋沢雅英氏、相馬豊胤ご夫妻、狩野安さん、和田リエンさんでした。“ブックマン博士との出逢いが自らの人生にどのような影響を与えたのか？”、“ブックマン博士の功績について”、“博士の日本に対するビジョンと日本の現状とにどのようなギャップがあるか、又、そのギャップを埋めていくためには何が出来るか？”等の質問が投げかけられました。又、多くのインタビューは一般財団法人MRAハウスのご好意で、同ハウス内で行われました。

尚、イマッド・カラムさんは、現在、ICインターナショナルの評議員の一人ですが、2015年1月からは、新しく設けられる専務理事としての職責を担われることになっています。

*イレーヌ・ロー夫人：ナチスドイツへのレジスタンス運動にかかわったため、自分の息子が捕らえられ目の前で拷問を受けた。この体験から、戦後初めての選挙で選出された女性国会議員としてスイスのMRAコー世界会議に招かれた折、ドイツの代表団が来ることを聞いて、「ドイツ人と同じ屋根の下にはいられない」とコーを立ち去ろうとした。その時、ブックマン博士から、「欧州の復興がドイツ抜きにできると思いますか？」と問われ、三日間熟考した結果、「ドイツ人にたいする自分の憎しみを解放しない限り、自分は欧州の復興、和解には貢献できない」と気づき、ドイツからの代表団に、自分の抱いていた憎しみを謝罪した。その後、ドイツに招かれ、その破壊尽くされた街々を目のあたりにし、ドイツの人びとも如何に戦争の犠牲になっていたかを知り、各地で自分の抱いた憎しみの過ちを詫言。戦後、個人としてフランスとドイツの和解にもっとも貢献した女性と評価されている。



▲波澤氏と共にカラム氏(右2人目)とチーム

【入会のご案内】

当協会は、皆様からの会費及び寄付金により運営されています。世界の平和につながる青少年の育成や国際交流活動等のため、是非ご入会の上、ご支援ください。

- 個人正会員 会費年額 6,000円
(議決権を行使できます)
- 個人賛助会員 会費年額 3,000円以上
- 法人賛助会員 会費年額 50,000円(一口)

@編集後記

学校訪問プログラムやIC国際フォーラム、そしてコー世界会議等全ての弊協会の行事に物心両面でご支援助下さった各地のIC協会会員の皆様、そして多くの関係者の皆様、又、これらプロジェクトを助成下さった一般社団法人東京倶楽部、そして一般財団法人MRAハウスの皆様に心からお礼申し上げます。

(編集委員：岡本 さくら、兼松 恵、長野 清志、中山 啓介、弓場 睦)